

2007.8.5

146

編集 樋口 みな子

E-mail

minginga@agate.  
plala.or.jp

郵便振替

「銀河通信」

02740 - 7 - 56535

(6号分1,000円)



## 銀河通信が19周年を迎えました



7.20 若松みき江さんに、満州からの引き揚げ体験を聴くみな子

銀河通信が7月で19周年になりました。こんなに続けられるとは思いませんでしたが、読者の皆さんに支えられてなんとかここまで来ました。上手な文章を書こうと思ったらとても続けられなかったと思います。19年たってもこの程度なの？とお叱りの声が聞こえそうです。文章のまずさや言葉足らずはお許してください。

7月は格別忙しく山に明け暮れる日々でした。そんな時に北海道民医連新聞の依頼で児童文学作家である若松みき江さんをインタビューする機会がありました。

満州の安東から家族4人、命からがら帰還船が出る葫蘆島まで歩き通した体験を語って下さりました。300人も大きな隊が帰還船に乗る時には、餓死や母子心中

などで半数の人になったそうです。

70歳の若松さんが、中学・高校生に戦争体験を語り継いでいることに、私も遊んでばかりいられないという思いに急ぎ立てられました。少しでも平和の尊さや、憲法9条がどれほど、私たちの暮らしを守っているのかイマジンしてみるの大切さを伝えていける通信でありたいと思います。

忙しい合間に平和を考える映画や本もたくさん読みました。そちらも合わせてお読みいただけたら嬉しいです。

7月23日は私の誕生日でした。家族にささやかに祝ってもらい感謝です！いつまで続けられるか自信はありませんが、健康であるうちは銀河通信の発行を続けたいと思います。今後とも応援よろしくお願い致します。

**パソコンのプリンターケースに入れています。郵送を必要としない方は無料です**



7.8 雄大なトムラウシを後にして前トム平で



7.1 山の仲間と湯の沢遊行 (撮影 鈴木和夫さん)

## 避難小屋トイレに看板取り付けました



山のトイレを考える会で、7月15～16日、避難小屋のトイレに看板を取り付ける作業に参加しました。

メンバーは4人。仲俣さんをリーダーに上田さん、加澄さん私です。15日は札幌を3時に出発。層雲峡から長い林道を車で走りクチャンベツ登山口に向かいます。登山口、7時半でした。林道途中で大きなクマに遭遇。その距離10m位。初めて見るクマに「カメラ！カメラ！」と構える間もなく林の中に消えてしまいました。

登山口を7時45分に出発し沼の原では雲の合間から一瞬トムラウシ山が見えました。大沼の木道を歩き五色の水場で美味

しい水で鋭気を養いました。ここからの急斜面。久しぶりの泊まり装備のザックが重い。

五色ヶ原では、チングルマの白、エゾコザクラのピンクが満開。大群落でした。チシマノキンバイソウがまだ少しでした。紫のホソバウルップソウの群落が涼しげでした。

あちこちに土の掘った跡があり、盗掘か！？と一瞬緊張しましたがどうも鹿の仕業のようです。あまりにも大量の掘り返しに驚きました。

花を楽しみながら、ようやく忠別小屋に着きました。

テントを設営後、看板取り付けと携帯トイレの使用経験など



忠別岳を望む 撮影 仲俣善雄さん

往路は、少しだけ荷が軽くなり、ニペソツやトムラの素晴らしい眺望を目に焼き付けて下山。2時15分でした。

### シジュウカラのさえずり

庭のシジュウカラの合唱で暑さをしのいでいます。裏庭に、手入れしてないのでスクスク伸びたナナカマドとリンゴとサクランボの木があります。葉の生い茂った場所が気に入ったのか、毎朝シジュウカラが5～6羽美しいさえずりを聴かせてくれます。まるで高原にいるよう。一服の清涼剤です。よく観察すると、庭に古くて放置されたままになっている天体望遠鏡の筒状の台が、誰からも邪魔されない格好の巣になって、筒の穴へとしきりに餌を運ぶ母鳥の姿がありました。

庭に出るときも気を遣うようになりました。驚かしては可哀想なのでそっと見守っています。

を聞くアンケート調査を行いました。小屋に泊まっていた人は25人前後。テントは私たちのテントを除いて五張りです。用意したアンケート用紙は全部なくなりました。

山の世界は狭いですね。私も20年ぶりに知人に出会いました。

16日は快晴。トムラウシに登る上田さんと別れ分岐にザックを置き忠別岳に登りました。

イワブクロ、ハクサンイチゲの群落が見事でした。トムラウシの勇姿をはじめ360度の展望に感激でした。



雲の合間から姿を現したトムラウシ山



# 満州からの逃避行を語り継ぐ

児童文学作家

## 若松みき江さん



札幌在住の児童文学作家、若松みき江さん(70)にインタビューしました。「母は2歳だった3男の幸平を一人、中国大陸に残してきたことを詫言ひ続け、戦争を起した支配者を憎み通して生涯を終えました。幼子の泣き声に平静を失う母のような人生を、未来ある子どもたちに送ってほしい」と若松さんは語ります。(聞き手・樋口みな子)

若松さんは、旧満州の安東でハルビンで9歳から9歳まで育ちました。当時の満州には、丑族協和(王道業士)のトロイカに踊らされた日本人が、満蒙開



拓団や開拓義勇軍、花嫁なも翻訳されて、昨年、中国国内で出版されました。1940年5月、商社員だった父親が召集され、ハルビンを逃れ、辿り着いた安東の叔父の家は接収され、八路軍(共産党の軍隊)の高官家族が住んで迎えました。その後の1年に及ぶ母子5人の逃避行を、若松さんの分身である8歳の少女、亜希の目で描いた長編小説『約束の夏』(北海道新聞社刊)は、ふるさと自費出版大賞など数々の賞を受賞し、中国語に

も翻訳されて、昨年、中国国内で出版されました。1940年5月、商社員だった父親が召集され、ハルビンを逃れ、辿り着いた安東の叔父の家は接収され、八路軍(共産党の軍隊)の高官家族が住んで迎えました。その後の1年に及ぶ母子5人の逃避行を、若松さんの分身である8歳の少女、亜希の目で描いた長編小説『約束の夏』(北海道新聞社刊)は、ふるさと自費出版大賞など数々の賞を受賞し、中国語に

「母はこのままで幸福が死んでしまふ」と、弟を松福な中国夫婦の養子に

### 大陸に子を残した母の悔恨、戦争への怒り

# 憲法9条は日本の宝

する決意をしました

子どもを託す時、母親は決して探さない。親子の名乗りをしない」と中国人夫婦に約束しました。その約束を戦後62年、一家は守り通しました。

子どもを置き去りにしたことを母は生涯悔いていました。先年、90歳で亡くなりましたが、精神のバランスを崩さなくなったのは認知症になった、わずかな数年の間だけでした

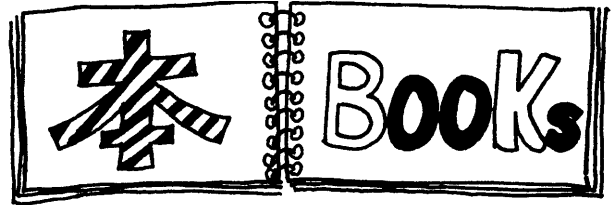
国民党と共産党が両軍の戦闘を停止し、日本人の引き揚げに協力することが決まりました。若松さん一家は安東から、船運船が出る葫蘆島まで、300人で隊をつくりました。300人で隊をつくりました。若松さんは「さすが後輩たち」と若松さんは胸を熱くしました。その後、柄の悪い男たちが学校に押しかけ、生徒に危害が及ぶかもしれない事態が起きました。若松さんは「そんな時代なんです、今の日本は」と顔を曇らせて

「寂兵は命かけても阻むべし母・祖母・おみな年に満つる」と詠まれたのは1978年、福田首相が有事立法の研究を指示したときのことでした。時代は進み、安倍首相は3年後の改憲を公約しています。

若松さんは地域の九条の会で活動し、語り部として中高生らに体験を語り聞かせる活動も続けています。「体験を語ることは正直つらいです。でも、戦争がなければ、弟ごの別れもありませんでした。私はあの戦争を記憶する最後の世代だと思います。体験した者として伝えていかななくてはと思っています」

# 「9条やめるんですか？ 北の国から憲法を考える」

北海道新聞社編 571円+税



参院選に間に合うように緊急に発刊された本書は、北海道にゆかりのある人たち9人が発言しています。

表紙はいかにもやっつけ仕事という感じですが、憲法9条への思いがストレートに伝わってきます。

小学生時代、北京で暮らした作家の加藤幸子さんは、親友の朝鮮人が何故日本語が上手だったのかと気がついたのが中学生の時でした。日本語を押しつけられた朝鮮人の哀しみに思いをはせ、今武器ももたず、素手でいることに誇りの持てる憲法9条をもっている日本は、戦争の火種の消化作業が出来るのだと語ります。アイヌ民族のアドイは武器ではなく「ウコチャランケ」（互いに言葉に魂をのせて解決するまで話し合う）の精神を説いています。詩画家の坂本勤さんは、装置をあやつる人間も装置の制約

の中で生きねばならない人間も流されやすい、もろさや凶暴さを内に持つ。残虐さを持っている自分自身への怖れを率直に語り、だから重石が必要であり、それが憲法なのだと言う。満州での引き揚げ体験を持つ若松みき江さんは、敗戦のどん底から立ち上がることが出来たのは、憲法9条を誇りとし憲法に守られていたからと訴えます。小野有五さんはイマジンやジョンを愛するなら、いまこそ憲法9条を世界に向かって伝える時なのだと呼びかけ、加藤多一さんは憲法9条のおかげで62年間も他国民や国民を殺さなかったことが誇りと語り（数人抜けました）9人それぞれの感性で、9条の素晴らしさを語っています。

憲法に関連する史実の年表や、アウシュビッツの現場報告なども掲載。

安倍総理の思いのままにはさせぬぞという、仮屋さんら編集者の心意気が伝わってきます。

3年後には国民投票日がやってきます。無関心ではられません。是非読んでいただきたいブックレットです。

## 「異国の客」 池澤 夏樹著 集英社 1600円+税

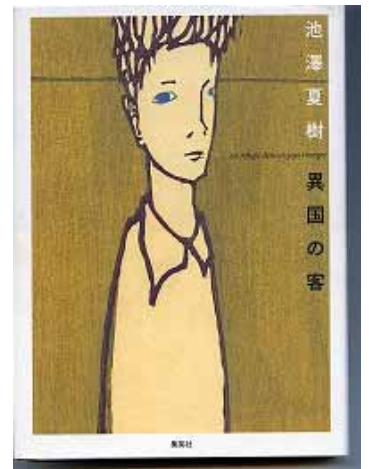
10年暮らした沖縄（那覇に5年、知念村に5年）を離れて、今はフランスのフォンテーヌブローに移住した池澤夏樹が見聞し、思索したエッセーであり、社会時評です。

異国の客というタイトルに惹かれました。旅人では、うわべのことしか見えない。どこかでせめて季節の一巡を辿らなければその土地の本当の姿はわからない。その一巡してみたフォンテーヌブローから見たのは、・・・。

「黄色い空、学校、宣言」の項では著者が住むフォンテーヌブローの学校事情を伝えています。著者の子どもが通う小学校は、生徒一人づつのペースに合わせた教育というのが原則で、子ども達が自分で学習計画を作って勉強しドリルの採点も子どもが自分です。先生はその時々必要な指示を与えるだけ。日本はどうだろう。教師は生徒を見る以上に上を見ているという印象で、上が焦って方針を変えるたびに現場は混乱し、生徒は取り残されると手厳しい。また高校生が教育制度の改革に反対してデモする姿も伝え、自分で考え行動する力は、小さな時から培われたものだと感心しました。

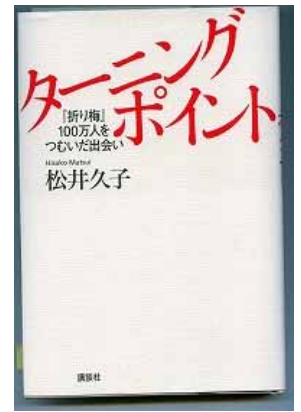
フランスでは記念碑や記念の像が多いと言います。「過去が濃いのだ。振り返ることを促す仕掛けがたくさん用意してある。フランスだけでなくヨーロッパ一般についてもそう言えるかも知れない。」日本との違いを否が応でも意識している著者の目は深いなあ。日本も新しい物を作るだけでなく、歴史を伝える物がどこにでもあれば、戦争は二度といやだと想像出来るのではないのでしょうか？

この本を読んで今は亡き義父を思い出しました。義父はパリの郊外のアンジェに単身で住み絵を描いていました。私たちの結婚の時も帰国はせず、10年くらい住んで義母のところへ帰ってききましたが1年足らずで天国に逝ってしまいました。70歳でした。どんな所で暮らしていたのか訪ねることが出来なかったのが残念です。



## 「ターニングポイント」 「折り梅」 100万人をつむいだ出会い

松井久子著 講談社 1524円+税



映画監督になったのは50代。松井久子さんのターニングポイントには必ずその時どき「人」との出会いがありました。20代の雑誌ライター時代、30代のマネージャー時代、40代のプロデューサー時代、そして50代の映画監督。本書はその時どきの出会いを綴ったエッセーです。

私は、松井さんの映画「ユキエ」も「折り梅」も観ています。女性監督らしい、丁寧な人物描写に感動しました。「ユキエ」は戦争花嫁としてアメリカに渡り、アルツハイマーになったユキエと夫との夫婦愛を描き、倍賞美津子がアメリカの風土にぴったりあって違和感がなかったし、松井さん初監督の思い入れがいっぱい詰まった映画でした。介護の現実が描かれた「折り梅」は松井さん自身が寝たきりになった父親の介護のときを迎えて、どうしても作らなくてはならなかったと知り、改めて100万人の人が共感して映画を支えた事に納得したのです。

20代でしょうか？雑誌の取材で知り合った高倉健さんと時々お茶したエピソードが楽しく健さんびいきの私は「いいな～」と思わずつぶやいてしまいました。大スターではない素の茶目っ気たっぷりの健さんが語られています。

33歳で離婚。その時5歳の息子の言葉がすごいです。「お母さん。もういっかい、がまんしてみる気ない？がまんできたら、自信つくと思うけど」でした。息子を育てるために必死に頑張った松井さんは、息子に支えられもしたけど、中学生の頃は母子の衝突が絶えなかったと書いてます。息子は15歳で日本を飛び出し、ロンドンへ。語学学校の先生と喧嘩してジュネーブの高校に入学するのですが、年間ン百万の授業料の仕送りのために仕事を頑張ったそうですから、母は強しですね。その息子がアメリカ、ルイジアナでの「ユキエ」ロケの通訳を務めるのです。スタッフとの軋轢に苦しむ母の姿を見ながら励ました息子が頼もしい。親子の関係が縦から横へ。対等な関係になったと記しています。映画を作るってすごいエネルギーが必要なことを知りました。

映画を作ったことで恵まれたたくさんの出会い。日本中の人びとに観てもらいたいと願っていたときに会った京都の配給会社の伊藤さん。この方が縁になって香川県から自主上映が始まって行くのです。「痴呆の人の気持ちを、こんなにやさしく描いてくれた映画なんてなかった」と各地で上映会が開かれるようになるのです。各地のひたむきな女たちとの出会いがまた「折り梅」制作とつながっていくのです。私もこんな自主上映会やってみたいと思いました。



## 「約束の夏」 若松みき江著 北海道新聞社 1524円+税

先日、若松さんから満州からの引き揚げ体験を聴きました。（詳しくは3ページをお読み下さい。）

本書は戦後命からがら引き揚げる一家5人の逃避行を8歳の少女の目で描いた長編です。若松さんの家族を投影しています。

体験した人でなければ描けない情景描写が目につくようで一気に読みました。

食べることも大変な時代、身内さえも思いやる気持ちを失っていたときに、守ってくれたのは中国の人たちでした。命がけで子どもたちを守ろうとしたのに、末弟を中国人夫婦に託さざるを得なかった母の哀しみに胸がえぐられました。

若松さんはあとがきで「国際約言でもある9条を変えようという

動きのある今、戦争は絶対にしてはいけない、という母たちの願いを守って次の世代に真実を伝えていく責任が私たち戦時体験者にはあると思います。」と記しています。

新憲法が公布されたとき、母正子さんは、戦争放棄に「これで子どもたちを戦争に取られずに済む」と心から喜んだと語ってくれた若松さん。若い世代にこそ読んでもらいたいとの思いが伝わってきます。

第1回ふるさと自費出版大賞を受賞し、後に加筆して冒頭の出版社から出版されました。作家の李恢成氏が「人間の約束を守る、というのはなんと至難なわざか。この小説の成功は、まさにその深淵に読者を文学の力で引き入れたことである。」と評しています。



「子っこヤギのむこうに」 加藤 多一著 千葉三奈子画  
くもん出版 1100円+税

食の安全が脅かされています。食肉の偽装事件を起こしたミートホープ。すっかりミンチ類は我が家の食卓から消えました。

低農薬、無農薬野菜や肉は手間暇がかかる分、価格が高くなりますが生産者の顔が見え、安全で美味しいですね。

冬休みで東京から北海道に遊びに来ていたユミが一匹の子っこヤギのいのちを通して生きもののあり方、いのちの尊さを知る物語です。

生まれてはじめて子っこヤギをだかせてもらえる。マユはうれしさと胸がいっぱい。ふぶきのなか、農家へ急ぎます。でも子っこヤギに会っ

たときには冷たくなっていました。子っこヤギの死を悲しむマユに「冬のあいだ、食うものがなくて死んでしまう生きものもけっこういる。カラスもスズメもキツキも。ネズミもイタチもみんなはらをすかしている。子っこヤギの体にどれほどたすけられることか。」厳しい自然を相手に安全な野菜を作っているおじさんのことばです。

生きていたヤギをだっこできなかったのに、死んだあとのことを理解するのはむずかしい。童話は声に出して読むと、心の中に入っていくのでしょうか？大人は頭で理解しようとするけれど子どもはきっとやわらかい心で感じるのでしょうかね。

ユミが雪の原っぱに立っていたふしぎな木をみつけて半分白くて、半分黒いのを見て、子っこヤギのいのちをみつめる情景が、千葉三奈子さんの画と共に詩的で想像力をふくらませてくれます。

忙しい夏でした。7月26日から29日まで日本山岳会の行事、自然児学校で新冠の森で4日間子どもたちと過ごして来ました。どうやって時間を作ったのか、登山の合間に紹介出来なかった映画、魂萌え、フラガール、約束の旅路、ユキエも再度観ました。好きなんですね。(みな子)

# 映画

## 「ドレスデン、運命の日」

ドイツ

ローランド・ズゾ・リヒター監督



第二次世界大戦末期、連合軍の大空襲によるドイツ一美しい歴史の街ドレスデン壊滅の光景は史実に基づき、市民の側から迫真的に描かれ、敵の英軍兵との恋が縦糸として物語が展開します。

父が経営する病院で看護にあたるアンナ（フェリシタス・ヴォール）は有能な医師の婚約者もいます。

1945年2月。ドレスデンにも激しい戦線が迫ります。アンナは偶然地下室に潜んでいた重傷を負った口バートをみつけ、傷を手当てしているうちに恋が芽生えます。口バートは敵の英空軍兵でした。本映画は英独双方の和解と反戦を目的として制作され市民の目で戦争の悲惨さと無意味さを訴えています。

無差別爆撃がすさまじい。集中砲火をあびたドレスデンが、アンナたち、市民の目で描かれます。歴史的建造物が瓦解し、おびただしい人たちの焼けこげた死体に、目を覆いたくなります。

子どもや女性、なんの抵抗もできずに死んでいった多くの人びとの無念の叫びが聞こえてくるようでした。戦争という時代に翻弄されながらも愛しあう二人の姿が反戦のメッセージとなって心に響きました。アンナが自由闊達な女性を演じて魅力的。ユダヤ人の夫を愛し、命がけで守ろうとするアンナの同僚の看護師の姿も印象的でした。

倒壊した聖母教会は1994年から瓦礫を可能な限り元の場所に戻すという大変な作業のもとに再建が進められたことも知りました。

ラスト、現在のドレスデンを象徴するように蘇った聖母教会が映し出されます。

戦争の歴史は、映画で見ると本当に良く理解できます。ドイツは若い世代に戦争の実相をいろんな形で伝えていていることに感動しました。



## 「世界最速のインディアン」

ニュージーランド・米国

ロジャー・ドナルドソン監督

インディアンとは、伝説的なバイクの名前。ニュージーランドに住む63歳のバート・マンロー（アンソニー・ホプキンス）がこの愛車のバイクに乗ってアメリカでのスピード大会に挑む爽快な映画です。実話というのも驚きでした。

狭心症の発作に苦しみながら、アメリカまでの長旅。会場にたどり着くまでがハラハラ。愛すべきマンローが旅の途中でさまざまな人と出会い助けられます。少年のようなマンローの無謀な夢の実現に誰もが力を貸すのです。

誰もが、こんなボロバイクが走れるのか？と見守る中、スピード記録に挑むクライマックスにワクワクしました。63歳とは思えない若々しさで、塩湖の大平原を疾駆します。すごい！世界新記録です。

白い大平原を疾駆するインディアンが、一本の赤い線になって迫力満点。挑戦するホプキンスの笑顔が素敵でした。

私もまだ何かに挑戦できるんだと勇気づけられました。

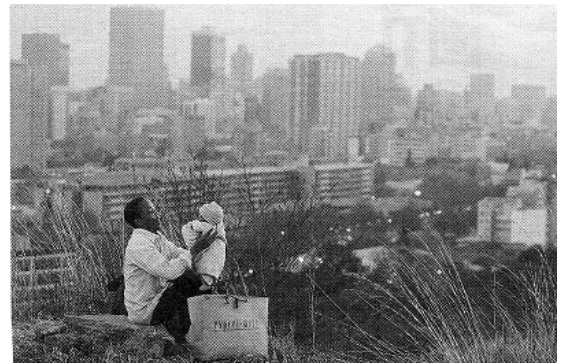
## 「ツオツイ」 南アフリカ

ギャヴィン・フッド監督

南アフリカ作品で初めて、2006年米アカデミー賞外国語映画賞を授賞した本作は、スラム街育ちの不良少年が再生するまでの心の変化を描きます。

人種隔離のアパルトヘイトが廃止されて10数年。差別のない社会をとり戻したはずの南アフリカでは依然として差別がなくなっていない現実を伝えています。

ツオツイ（不良）と呼ばれる少年は、仲間と組んで窃盗やカージャックを繰り返し、怒りと憎しみだけを胸に生き



延びていました。お金持ちの黒人が暮らす住宅街に身を潜め、帰宅した女性が車から降りてきたところで銃で脅し、車を奪います。ツオツイは奪った車の中にいた生後数ヶ月の赤ん坊と出会うのです。生まれたばかりの小さな命に、ツオツイはさまざまな記憶を呼び覚まします。貧しくとも家族がいた幸せだったのでしょうか？

大きな紙袋に入れた赤ん坊をどう扱っていいか困ったツオツイは幼児を抱えた若い女性の家に押し入り、赤ん坊を差し出します。自分の子どものように、乳を飲ませ、体をふいてくれるのを見てツオツイの目が優しくなるのです。

その小さな命と向きあうことで、かけがえのない他者や、自分の命に気がついた少年の表情が良かったです。自分を取り戻した瞬間でした。

日を重ねるごとに増す赤ん坊への愛着。幼児を抱えた女性への淡い思いも人間らしさを取り戻すきっかけになったのだと思います。

誘拐犯として捜査の手が伸びてきているのを知ったツオツイは、逡巡しながらも夫婦に返すことを決めます。赤ん坊を抱き上げ、最後のお別れをする場面、「いい人生を送れよ」と言っているようで、少年の未来も希望にあふれる人生であって欲しいと祈る思いでいっぱいになりました。

購読料をありがとう 2007.6.6~7.27

角田慶子（札幌市）片山篤子（札幌市）大橋晃（札幌市）泉加澄（札幌市）前原満之（宮崎市）  
新井貴美子（北広島市）関口興洋（北九州市）小池修生（札幌市）北川麻利子（札幌市）若松み  
き江（札幌市）

カンパも含めての方 山川陽一（多摩市）10,000円佐藤民枝（札幌市）10,000円鎌  
田直子（市川市）5,000円今田美知子（札幌市）3,000円新妻徹（札幌市）5,000  
円榊原いづみ（浦河町）5,000円加藤多一（長沼町）著書（敬称は略します）

合計 49,000円は印刷と送料に使わせていただきます。ありがとうございます。PCで購  
読する方はお知らせください。発送分からはずしたいと思います。



## 「ブラックブック」

オランダ・ドイツ・英国・ベルギー合作  
ポール・バーホーベン監督

第二次大戦に関わる映画ばかりの特集になりました。ハリウッドで活躍しているポール・バーホーベン監督が故国オランダにもどって、黒い手帳に関わる実話を映画化しています。

1944年、ナチス。ドイツ占領下のオランダで、ユダヤ人歌手のラヘル（カリス・ファン・ハウテン）は家族とオランダ南部に逃げようとして、何者かの裏切りで両親や弟を殺されてしまいます。元医師のハンス（トム・ホフマン）らオランダレジスタンスに助けられたラヘルはエリスと名を変え髪を染めて、ドイツ軍諜報部のムンツェ大尉（セバスチャン・コッホ）に近づきます。

エリスの諜報部に潜入しての行動、抵抗側の活動、ドイツ軍の弾圧などがサスペンスタッチで息もつかせず展開します。

敵の中にも戦争を早く集結したいと考える人、欲に目がくらみ、レジスタンスのメンバーの弱みをにぎって利用する人など戦争に関わる人間の複雑さがからみあって、弾圧と抵抗の葛藤に見る者を引き込んでいきます。エリスはムンツェの人間的な優しさに惹かれていきます。親衛隊将校の残忍さは、恐ろしいほど。レジスタンスの仲間を虫けらのように殺す場面が、戦争のむごさを浮き彫りにします。たくさんの死を前にして「悲しみに終わりはないの？」ラヘルの言葉が胸に刺さります。

ナチス・ドイツの戦争犯罪の映画は何本も見ていますが、抵抗組織の中にも裏切りやスパイがいたことに驚きました。

4カ国合同で作られた映画にはあの「悲惨で残酷な戦争を忘れてはならない」というメッセージが込められ、すさまじいまでの戦争の実相に胸がえぐられました。

## 養護学校の子どもたちと空沼登山

「山の道を考える会」が主催して空沼登山が6月30日に行われました。札幌市内の児童養護施設の子供達13名、職員3名を迎えての登山です。

中学1年から高校3年までの男子生徒13人は、体力は十分にあるけど、スニーカーではちょっと大変だったと思います。頂上では雲の間から青空がのぞき狭薄山、小漁岳が姿を現しました。

賄い隊の大魔人さんの手打ちそばが絶品でした。かすみさん、里ちゃんの賄い隊の豚汁、ウドの天ぷらが美味しかったです。特にウドは子どもたちに大好評。

私もささやかなお手伝いが出来て楽しかったです。



万計山荘前で 写真提供 仲俣善雄さん

## 湯の沢遡行



16日は子どもたちを見送り10人で湯の沢遡行を楽しみました。

入渓してすぐにきれいな一枚岩の滑の連続。ここだけでも十分に楽しく満足しました。岩もしっかりして歩きやすく快適でした。身近な所にこんな素晴らしい沢があったことも新鮮な驚きでした。北海道の秘境、再発見の連続でした。シャワークライミングも体験。天気がいいので水の冷たさが心地良い。ハイライトはP750のゴルジュの滝。ザイルで確保してもらい10mの豪快に降り注ぐ滝の突破はハラハラドキドキ。

ホットしたのもつかの間。もうひとつ、厳しい沢を越えて行く。あのQさんは「大木に掴まって」と上から指示するが滑ってうまくつかめない。ザイルで確保してもらい突破しました。ここが最大の難所でした。大滝を左から高巻き苔むした沢を越えると万計山荘につながる林道に出ました。